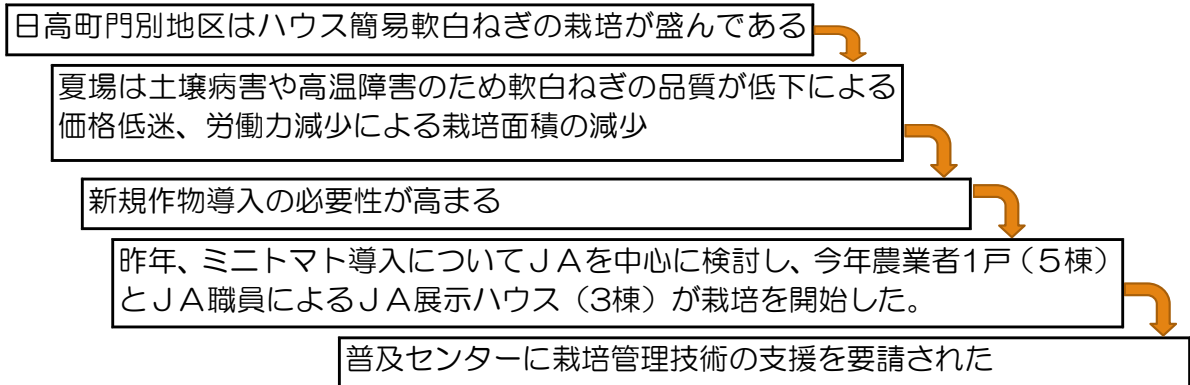


# 軟白ねぎ後作ミニトマト栽培導入の支援 ～門別地区新規作物導入支援～

(課題番号 16)

- ◆活動年次：令和3～令和5年度
- ◆対象：日高町門別旭地区（1戸）

## 1 課題の背景



## 2 活動の経過

### (1) 巡回による栽培支援

新規でミニトマト栽培を始める1戸の農業者に、ミニトマト栽培の要点とねぎ連作ハウスの肥培管理を中心に支援した（表1）。

表1 巡回実施状況

月	巡回日	支援内容（農業者）	月	巡回日	支援内容（JA）
7月	7	セル育苗支援	7月	7	生育状況確認
8月	13,18,31	定植後調査	8月	18	生育状況確認
9月	8,16,24,31	硝酸態窒素調査	9月	8,24	生育状況確認、出荷確認
10月	4,12,21,27	肥培管理支援、品質調査	10月	4	出荷確認
11月	10,17,22	着果管理、肥培管理支援	11月		

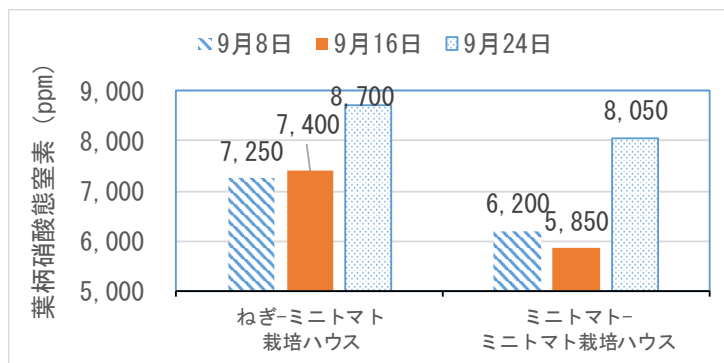
### (2) 葉柄硝酸態窒素による窒素診断の実施

ねぎ連作ほ場では残肥が多い傾向のため、基肥は無施肥とした（表2）。無施肥では、第4花房開花期頃に肥料不足の恐れがあることから、葉柄硝酸態窒素濃度を3度測定した。その結果を基に支援したところ、追肥は適切に実施された（図1）。

表2 土壌診断結果（軟白ねぎ栽培後、ハウス平均値）（単位：mg/100g）

	pH	EC	硝酸態窒素	有効態リン酸	交換性加里	交換性石灰	交換性苦土	仮比重	CEC
A氏	5.8	0.32	5.9	89.7	121.3	329.7	95.0	0.74	19.5
JAハウス	5.9	0.25	3.7	95.0	69.2	356.5	38.1	0.68	20.2

※網掛け：好適値より過剰な値



※4,000～7,000が目安  
追肥により値が増減する  
※追肥回数1回9月23日  
複合液肥533 12kg/10a

図1 ミニトマト葉柄硝酸態窒素濃度の推移(左)

(3) 茎径、着果数調査による草勢の確認

茎径調査や着果数調査を実施し、草勢の低下や過剰施肥による過剰着果を調査した(図2、表3)。その結果から、好適な状態で栽培されている事を確認した。

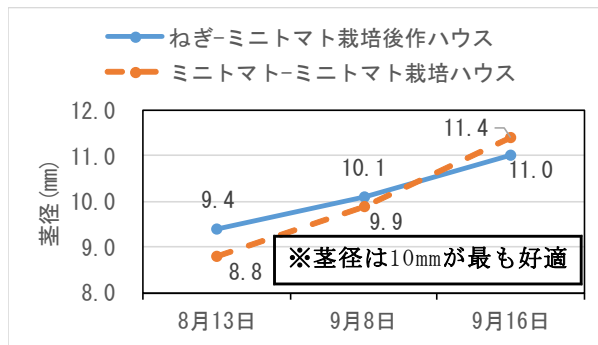


図2 茎径の推移

表3 果房毎着果数調査(10月13日)

	第1	第2	第3	第4
ねぎ-ミニトマト栽培ハウス	46.8	31.0	26.2	6.5
ミニトマト-ミニトマト栽培ハウス	32.7	34.2	27.3	13.0

※50果/房以上で規格外果(2S)が発生しやすい

3 活動の成果

(1) 収量(目標販売額達成農家戸数(100万円/10a)0戸→1戸 抑制栽培)

表4 収量と販売額(抑制作型)

10aあたり収量	4,500kg
10aあたり販売額	約200万円

農業者は、共選により収穫後の調整作業等の身体的負担が少なくなり喜んでいて(写真1)。

予想以上の収量だった。他産地より1t/10aも多かった。ミニトマトは共選出荷だから楽だね。



農業者の声

(2) 結果の考察

ア 農業者のつながり

導入にあたり、軟白ねぎ栽培者や町の農業支援員の協力があった(写真2)。協力した方達は、視察への参加や、ミニトマト栽培の支援に応じる事で栽培のノウハウを学ぶことが出来たので、次年度以降の参入につなげることが期待される。



ミニトマトは儲かるから良いね。JAのハウスも取れたよ

写真1 共選の前処理

イ 関係機関団体の連携

JA門別と普及センター、日高町役場で協議を行い、日高町の農業ビジョンの中にミニトマトを入れた。その動きに伴い、JAはいち早く他作物の農業者へミニトマト栽培の勧誘や、共選機を導入を行った。さらに町、普及センターがその活動を支援したことが、ミニトマトの導入が進んだ要因だと考える。



ミニトマトはこうして植えるんだね。ミニトマトは面白そうだね。

写真2 農業者と農業支援員の定植支援

4 今後の対応

(1) 新規参入者への対応

次年度、軟白ねぎ栽培者から1戸、町の農業支援員が1名、新たにミニトマトの栽培を開始する。いずれも軟白ねぎ、又はハウスアスパラガス(春取り)との複合経営のため、収益性が良く負担のない作型、栽培方法を支援する。

(2) 今後2カ年の方向性

軟白ねぎ栽培農業者でミニトマトに興味のある方へ情報提供し栽培への誘導を行う。また、試験の実施により、冬~春:軟白ねぎ、夏~秋:ミニトマトのような栽培体系を確立する。町、JAと連携し、農業支援員(新規参入者)のミニトマトでの就農を支援する。